氏　　名　片平　幸

学位（専攻分野）　博士（学術）

学 位 記 番 号　総研大甲第795号

学位授与の日付　平成１６年９月３０日

学位授与の要件　文化科学研究科　国際日本研究専攻
学位規則第６条第１項該当

学 位 論 文 題 目　＜日本庭園＞像の形成と解釈の葛藤：英語圏の眼差しと日本側の応答（１８６８～１９４０）

論 文 審 査 委 員　主　査　教授　井上　章一
教授　稲賀　繁美
学長　横山　正（情報科学芸術大学院大学）
教授　北澤　憲昭（跡見学園女子大学）

論文内容の要旨

本研究は、近代における西洋の評価と、それに対する日本側の応答の循環が、「日本庭園」の解釈の史的変遷にどのような影響を与えたのかを考察するものである。ある一定の解釈の枠組が歴史的、社会的に形成されていくプロセスと、その中で生成する表現や概念そして鑑賞のあり方を明らかにした。

西欧と日本の解釈の葛藤を対象にした上で、本研究が最終的に見据えているのは、〈美〉の受容史というテーマである。それはまた、西欧と日本の間における異文化の接触によって、〈美〉あるいは〈美〉を取り囲む価値観とはどのように発生し、変容を遂げていくのかという文化間の〈意思の伝達〉の問題でもある。

第一章では、明治期と大正期における庭園をめぐる議論を考察した。明治期には各地の庭園をそれぞれ個別に扱うアプローチが主流のなか、横井時冬や本多錦吉郎による文献は、通史や概論という性質をもち、庭園を「美術」と捉え、学問の対象として確立させようとする関心の芽生えが映しだしていた。それが明治期後半になると、徐々に廃藩置県や廃仏毀釈などによる庭園の破壊が問題視されるようになっていく。そうした状況に対する関心は、小沢圭次郎が記しているように大正期になるとさらに高まっていった。庭園の保存をめぐるこれらの諸相は、前近代の文献などを参照しつつ、庭園の価値を問う議論を生んでいった。それは、大正期の「造園学」という新しい学問領域の確立にともなって、「名園」の選出へと繋がっていった。それらの選出の理由としては、世界各国では、「名園」をみとめ保存しているという点が挙げられた。すなわち、世界の文明国と同様に、日本でも「名園」を選出し保護していこうということである。こうして大正期に世界の基準に適合すべく選ばれた庭園は、昭和期に入って、また別の価値を担わされことになっていく。

次に第二章では、日本庭園の解釈／理解の交流史という観点から、欧米人によるまとまった日本庭園論としてはもっとも早いコンドルの *Landscape Gardening in Japan*（1893）の意義を明らかにした。この著作の原型となった"The Art of Landscape Gardening in Japan"（1886）という論文も含めて検討し、十九世紀末という思想空間における日本庭園論を位置付けることを試みた。コンドルはピクチャレスクへの批判を通じて、日本庭園論を構築し、さらにそれとオーバーラップする近代的な知の体系を、スペンサー哲学を暗示しつつ批判したのであった。コンドルの日本庭園論とは、十九世紀の西欧における知や美の体系を相対的に捉える視点を提示し、さらに「異文化としての日本」の創出に重要な役割を果たしたといえる。

コンドルとほぼ同時期に、日本の近代史上においてもよく知られる三人、モースとラファージ、そしてチェンバレンそしてハーンは日本の庭園について記している。そこで第三章では、庭園史という枠組にとどまらない日本と西欧の交流史という観点から、コンドルと同時代のモースとラファージ、そしてチェンバレンとハーンの論点を比較整理した。かれらの記述を分析すると、それぞれコンドルとはアプローチを異にしながらも、その関心は主として日常の生活文化に根ざした庭に向けられていた点で共通性をみせる。十九世紀末という段階では、欧米人の日本庭園論には、いわゆる「名園」志向は見出せないのであった。

日常生活の一部として日本の庭が記述される傾向は、その後の二十世紀初頭の欧米人に

よる旅行記や専門書に継承されていった。しかし１９３０年代に入ると、そうした西欧における日本庭園観は、ある転換をみせる。その契機となったのが、日本人による西欧向けの日本庭園論である。そこで第四章では、西欧と日本の庭園解釈の交流史において重要な役割を果たした原田治郎（１８７８－１９６３）の *The Gardens of Japan* を分析した。原田は、茶の湯と禅そして渋みの結合を日本庭園史の画期とみなし、その結実を室内から観賞する庭園の誕生に見出した。室内から眺め、連想や想像をもって庭園となる鑑賞法を、岡倉天心を参照し、ハーンの影響を暗示しつつ日本庭園の独自性として提示したのだった。原田の *The Gardens of Japan* は、その後、英語で著される日本庭園論で突出した頻度で参照され、平成十四（２００２）年にコロンビア大学出版から復刻が出版されるほどである。原田の功績は、国内では庭園研究者たちはもちろん、美術や他の隣接する領域の研究者たちにこれまで顧みられることはなかったが、本研究では、実務レベルでの媒介者に着目することの必要性をうったえた。

では、なぜ原田の *The Gardens of Japan* は日本国内でその存在は知られながらも、ほとんど評価されなかったのか。この問いを掲げつつ、第五章では、１９３０年代の日本の造園学者たちに着目した。１９２０年代後半とは、西欧の眼差しに対する自覚が日本国内の造園学者たちの間で芽生え始める時期といえる。それは１９３０年代という時差位相とともに強まり、日本人の研究者たちは西欧向けの日本庭園論を用意するようになった。それらの日本庭園論を分析すると、西欧向けの日本庭園像を論じるに当たって用いられたのは、造園学に根ざした概念ではなく、「わび」や「さび」といった用語が動員されていることがわかる。こうした概念の選択は、西欧的な庭園理解、あるいは欧米産の造園学的理解には還元され得ない「独自性」を日本が持ち得るという主張によってなされていた。「わび」や「さび」という概念を評価の基準に、室町時代から桃山時代に作庭された京都の臨済宗の寺院庭園が紹介される。これらの庭園は、第一章でみたように、既に近世から明治、そして大正期において「名園」としての地位を獲得していたものばかりである。しかし１９３０年代に入って、これらの「名園」は、西欧的な理解に収まらない独自性を背負わされるようになっていった。造園研究者の言説は、日本庭園を西欧の学問体系に整合する対象として扱う姿勢から西欧的な庭園理解には還元されえない独自性を強調する方向へとシフトしたのであった。

造園学の外部の概念や用語が動員され、日本庭園の独自性が主張された１９３０年代には、美学においても日本芸術の特殊性をめぐる議論が活発になるのだが、そこでは庭園が事例として使われることがあった。第六章では、１９３０年代における日本庭園の独自性を表す概念の生成に関わった美学の動向を考察する。美学者たちによる概念の規定を確認した上で、それらがどのように庭園研究者たちに流用されていくのか、その回路についても明らかにした。生活と芸術、人工と自然、そして創作と享受の間に境界線がないことを日本芸術の特殊性とみなした美学者たちが、事例として選んだのは、草庵風の茶庭であった。一方、庭園研究者たちもまた、日本芸術の特殊性と同じ要素を日本庭園の独自性として見いだすのだが、その事例として選んだのは、主に枯山水、特に京都の名刹であった。こうして昭和期に入って、日本独自の芸術性を担った名園として枯山水庭園が選出されていった。

以上の考察から、１９３０年代半ばころから枯山水庭園への関心が歴史的に構築されて

いった過程を明らかにした。

論文の審査結果の要旨

本論文は日本庭園という認識対象が、主として明治時代以降の海外の眼差しと日本の反応との狭間に形成された、とする仮説の立証を試みたものである。筆者はその手段として、1940 年に至る英語を中心とした日本の庭園を巡る著作 40 冊弱と、関連する日本側の著 50 冊ほどを基礎的な史料として、それらの歴史的展開と位置付けを批判的に検証した。

本論は、庭園の専門書に限らずジョン・ラファージュやエドワード・モース、ラフカディオ・ハーンらの庭園鑑賞法の背後に潜む価値観の葛藤などにも踏み込んでおり、また従来軽視されてきた、米国ガーデンクラブの視察 (1935) なども一次資料を発掘して、その歴史的意義や関連する庭園書刊行の流行ぶりを問い直しているが、その主要な成果を列挙すれば、以下のようになろう。1) まず明治 20 年代の海外にむけた日本庭園認識形成の中核となったジョサイア・コンドルの研究を取り上げ、その著書 (1893) に先立つ論文 (1886) に顕著なイギリスのピクチュアレスク美学の人工的な畸想に対する批判が、コンドルの日本庭園論の背後にあったことを実証したこと。2) さらにそのコンドルの著書が下敷きに利用した籬島軒秋里『築山庭造伝』(1829) から本多錦吉郎『図解庭造伝』(1898) にいたる系譜を再発掘し、その過程での換骨奪胎の実態を解析したこと。第 3) に真行草の区別に拘泥するコンドル系列の欧文書籍にみえる日本庭園理解の限界を批判する言動が、日本では 1920 年代以降主流となるが、それらがコンドルの知的背景（スペンサー心理学など）への無知を露呈していること。第 4) に、コンドルは庭園全体をパノラマとして眺望する視覚を重視したのに対して、原田治郎の英文の著作 (1928) が、室町の禅の流行と茶の湯を背景とした「渋み」に日本美学の粋を見いだし、京都の名園を具体的に指摘し、かつ室内からの眺望を重視することにより、新たなパラダイムを確立し、以降の欧米圏での著作に大きな影響を与えたものの、日本国内ではさしたる反響を得なかった状況を明らかにした。原田の著作が岡倉天心の『東洋の理想』に感化を受けた実態解明や、長らく忘却されてきた原田に関する一次史料の発掘、さらに、佐藤昌、針ケ谷鐘吉ら日本を代表する造園学者の原田に対する評価の低さとその背景の読解（造園学専門家と、茶人事務官僚との交流の少なさ）は、特筆に値する。第 5) に 1930 年代を迎えて、龍居松之助、田村剛らの庭園研究者、西川一草亭らの茶人、さらに金原省吾、鼓常良、大西克礼らの美学者の著作の相乗効果のなかで、中国とは差異化され、欧米に対峙しうる日本独自の美学論の模索--「わび」「さび」の重視--が、茶庭あるいは枯山水庭園を中心的な話題として浮上した様が明らかにされた。禅に日本庭園の特質を集約する解釈は 30 年代を淵源とするが、そこには欧米の無理解を強調する偏狭な国粋主義の跡のみならず、重森三玲のような国際的仲介者をも含む価値観の振幅が確認された。

本論文は以上のようにその成果において専門家からも高い評価を得たが、論証の手続きや技術的な史料操作などに、なお幾つかの欠点が指摘された。即ち 1) 佐藤昌、鈴木誠らの先行研究の結論の字句に拘って、かえって独自の柔軟な史料解釈が阻まれた点、2)『東洋古美術文献目録』をはじめとする多くの資料を参照しておきながら、その結果が必ずしも論文上に適切には言及されていない点などである。

以上のように本論文は、記載の体裁においてなお訂正の必要を認めるものであるが、これは論文の主旨及び成果の判定を左右するものではなく、むしろ視覚資料の分析方法、国

際的文脈の中での日本文化表象の変遷の跡づけなどにおいて、積極的に評価されるべきものと認められた。以上を踏まえ、論文審査にあたった5名の審査員は、全員一致で本論文を博士号認定に相応しいものと判断した。